

訳者あとがき

- 1 法政大学日本統計研究所は、特に 1990 年代から活発化した国際的な「統計の品質」論議を、統計学にとって最も基本的問題とみなして、これまでの統計研究参考資料でも逐次とりあげてきた。すなわち、①『「統計の品質」をめぐって－翻訳と論文』No.61(1999年 12 月)、②『「統計の品質」をめぐって－翻訳と論文(2)』No.79(2002年 9 月)、③「統計の品質(3)：国際統計機関における品質－Q2004 サテライト会議を中心に－」No.89(2005年 9 月)、④「統計の品質(4)：翻訳と論文－IMF・品質サイトと Q2004を中心に－」No.93(2006年 7 月)である。また最近の『研究所報』No.37(2007年 4 月 20 日)に、大内賞受賞記念シンポジウムの際に、国際統計品質論の実践面での先進的形態である「ヨーロッパ統計実践規約」をとりあげた伊藤の報告を掲載している。
- 2 統計研究参考資料での統計品質のとりあげの第 5 回にあたる本号 No.67 では、2006年 4 月 24-26 日に英国の Newport で行われた「調査統計の品質に関するヨーロッパ会議」(Q2006)と、そのサテライト会議として、4 月 27-28 日に英国の Newport で開催された「国際機関のためのデータ品質会議」について、それぞれへの提出報告の一覧と、その中から Q2006 からは 5 つの報告、Q2006 サテライト会議からは 5 つを選択して翻訳し、さらに、伊藤陽一のこれら会議についての案内・論評を収録した。両会議については、英国国家統計局(ONS,UK)のウェブサイトと国連統計部のトップページの UNSD partners の CCSA からのリンクで、そのウェブサイトを示されている。
- 3 訳出した報告等の原題・出所は以下の通りである。
 - I 部 Q2006 サテライト〔国際機関の統計データの品質〕会議
 - 1 会議の概要とセッションおよび報告一覧 ウェブサイトから
 - 2 Lars Lyberg, “Quality in Official Statistics : Some Recent and Not so Recent Developments”
 - 3 Peter Fullerton, “The Office for National Statistics ‘Statistical Modernisation Programme(SMP)’”
 - 4 Anders Ljungberg, “Reorganisation of Statistics Sweden”
 - 5 J.M.Bushery, Parmeta D.McGovern, Paul S.Marck & Howard R.Hogan, “U.S.Census Bureau”
 - 6 Claude Julien & Alice Born, “Quality Managaement Assenssment at Statistics Canada “
- II 部 サテライト〔国際機関の統計データの品質〕会議 (Q2006 サテライト会議)
 - 7-1 CCSA(Committee for the Coordination of Statistical Activities)
 - 7-2 Eurostat and ILO, Summary of the conference and conclusions

- 8 E.Giovannini, "Overview of last conference: content, directions taken and progress made"
- 9 M.Colledge, "Quality frameworks: implementation and impact"
- 10 Stephan Schewinfest, "The role of best practices in building a global statistical system"
- 11 Martina Hahn (Eurostat), "Code of Practice peer reviews: first steps in defining a European Statistical System wide approach"
- 12 Hilka Vihavainen (Statistics Finland), "Peer reviews—a driving force towards excellence in official statistics?"

4 これらの訳出は、2,3,5,6,7,8,9,12を伊藤陽一が、4,10,11を水野谷が担当し、原著者への翻訳許可要請も担当者が各自行った。このうち、4のAnders Ljungbergからは、特に本資料への訳出にあたって、追加補強の文章が寄せられた。また2のLars Lybergからは、パワーポイントのスライドではなく、簡単な文章化する意向も示され、当方も希望したが文章が届いていないので、スライドを掲載した。スライドでは必ずしも体系的な論述とはなっていない向きもあるが、他方で要点が簡潔に示されているメリットがあると考えた。訳出を了解された原著者の皆さんに深く感謝したい。

5 Q2001以降のヨーロッパ品質会議やISI等での品質セッションをみると、論議は品質を高める個別的諸手法、実践例（最善の実践あるいは優良な実践例）にも及んで多くの論点がとりあげられてきている。その経過の一端をヨーロッパでの重要なリーダーであるLars Lybergの基調報告におけるスライドが示している。しかし、日本にいる訳者たちの関心あるいは課題は、さしあたりは、会議の全体状況と品質枠組みを中心とする統計品質の全体の把握がどう進展し、また各国での実践がどう進んでいるのか、という大枠に向けられている。個別の手法や実践に関して関心を持つ場合には、これまでの統計研究参考資料において示したその都度の報告一覧の中から拾い上げて追跡していただくことで良いと考えているのである。

この関心から、本資料の第I部では、Q2006から、1:報告リストを上げた後、2:Lars Lybergの基調報告のほかに、統計制度の改革、あるいは部署における統計品質の向上をめざす主要国について—第1セッション「統計機関の近代化」から3:英国と4:スウェーデンを、第8セッション「政府統計の品質管理(1)」から、5:アメリカ合衆国センサス局と6:カナダ統計局をとりあげた。

第II部はQ2006から、7-1として会議の予告を、7-2では会議の結論をとりあげたうえで、8:では、この会議のいわば基調報告にあたるOECDのE.Giovanniniの報告を、9:では、基調的な意味合いを持つMichael Colledgeの報告、そして10:最善の実践(best practice)をとりあげ、同業者評価の方法に関する二つの報告として、11:ヨーロッパ統計システムにおける実践規約、12:フィンランドでの経験をとりあげた。

第III部では、伊藤陽一による、これらヨーロッパ会議についての案内・論評を掲載した。

6 特に折からの日本においては、戦後の統計制度再建された1940年代後半の論議と

実際の改革以降 60 年の間において、統計法の全面改訂と司令塔組織の設置をふくめて統計制度の改変、そして「統計計画」にそっての政府統計活動の展開という大きな変革が進行中である。これらの改革の中には、国際標準化しているといっても良い「統計の品質」論の進展など、国際的統計論議をふまえて、日本の統計活動がさらにアジアを中心とする貢献を拡大していくことが期待される。進行中の統計改革において、「統計の品質」に関する本資料をふくめて日本統計研究所の研究成果が幾分でも寄与することができれば幸いである。